



みの虫は何を食べて大きくなるの

みの虫はミノガの幼虫

みの虫は、冬、木の葉が落ちた枝にぶら下がっているのが、目につきます。でも、冬は、木の枝などを集めて作ったみの中、みの虫は冬眠中で、何も食べません。

春になると、みの中で、みの虫はさなぎになります。やがて、5～6月ごろ、みの虫は、ミノガになって出てきます。でも、これはオスだけです。メスは、みの中に入ったままで、羽化した後も、いも虫のような形をしています。オスのガがメスを見つけて交尾をすると、メスは、みの中に卵を産み、腹部の毛を卵の上にかぶせます。2～3週間後には幼虫がかえり、いっせいに長い糸をはきながら、みからぶら下がります。糸ごと、風にふかれて遠くの枝に飛ばされ、仲間は散らばっていきます。

やわらかい木の葉が、みの虫のえさ

運良く、やわらかい木の葉のついた枝に飛ばされた幼虫は、木の葉を食べて大きくなっていきます。幼虫は、まず木の葉の表面のうす皮を集めて糸であり、両はしがあいたつつ形の、みを作ります(ミノガの種類によって、ふ化したばかりのときに、メスの腹部の毛で、みを作る幼虫もいる)。作ったみを背おって、逆立ちするようなかっこうで、3対の足を使って動き回りながら、木の葉を食べます。近くの木の葉を食べつくしたら、長い糸で木の枝からぶら下がり、風にふかれて別の木や枝へ移動します。冬になると、みのが風で動かないよう、木の枝などにしっかり糸でしばりつけ、みのの入り口にふたをして、冬ごしをします。(監修・中山 周平)

